



「ウォーカー」氏著
通貨論第十九編
通貨主義及銀行主義、
發行者中ノ競争、
小額面紙幣ノ發行



414
A 1222
7



論

十九編

通貨主義及銀行主義

峯源次郎 譯

大正十一年四月
贈

交換紙幣カ緊密ニ都テノ場合ニ於テ其伸縮増減ヲ貨
幣ト同スルヲノ好願スベキ事ニ就テ二派其意見ヲ
同フスルハ余輩既ニ之ヲ上文ニ陳述セリ、而シテ余輩
ハ今一步ヲ進ミ場合ノ情勢同一ニシテ交換紙幣ハ實
際ニ貨幣ト大ニ其伸縮ヲ異ニスルヤ如何ノ主義ニ至
テハ二派大ニ其所見ヲ異ニスル所アルヲ論陳セント
欲ス

※「プロモソル、プライス氏云ク銀行紙幣流通高ノ膨伸脹
起スルヲアルノ論ハ背理ノ謬見ニシテ純然タル謬語
タルヲ外ナラザルナリ、又云ク交換紙幣ハ之ヲ束制

ル最 鞏固堅牢ナル 障碍物アツテ過度ノ發行ニ抗
※同氏著ス所ノ通貨原論一百一拾葉ヲ視ヨ「フライ
氏其宝貨論ニ於テ前代ノ經濟學者ニ就キ左ノ如ク
論述ス云ク「トク氏ハ真ニ右主義ノ事理ヲ辨別セ
リ「ミル氏ノ如キモ稍ク狐疑スル所ナキニアラスト
雖氏其他數人ノ論者ト共ニ銀行紙幣膨脹ノ謬見
ルヲ觀察セシモノナリ「同シク通貨原論ヲ視ヨ
「ウイルソン氏云ク純粹ニ貨幣ヨリ組成スル通貨若シ
クハ貨幣及ビ交換紙幣ヨリ組成スル通貨ノ分量ノ増
減價格ノ高下及ビ一般ノ伸縮ニ於テハ何等ノ變更差
異アル能ハス而テ特リ交換ノ主義ノミ能ク紙幣ヲシ
テ萬ノ場合各ノ關係ニ就キ緊密ニ貨幣ニ應合セシ
ムル十全ノ保証力タルヲ得ベシ是レ余輩ノ確乎不疑

ノ事實ナリト信スル所ナリ
※同氏著ス所ノ財本通貨銀行三論ノ第六十六葉ヲハ
十二葉ニ参考セヨ
右經濟派ノ論者中其袖領ナルモノハ「フルラルトン氏
是ナリ、同氏ハ通貨制法主義ニ就キ卓見高識ノ著述ヲ
ナセリ
「フルラルトン氏云ダ斯ノ如キ應合ハ道理上貨幣ト紙
幣トノ間ニ成存セザルヲ得ザルノミナラス實際上常
ニ成存スルナリ、若シ紙幣ノ交換主義カ十分實地ニ行
ハレシシモ遲滯障礙ノ害ニ遭遇スルヲナク紙幣ノ交
換ニ出ス所ノ貨幣モ其重量ト夾雜ノ純度ニ於テ十分
ニ合法價格ヲ有セシメ又其地金ノ貿易ハ既ニ貨幣
鑄造シシモノト否ラザルトヲ問ハス自由ニ放任シ

シモ、銀行紙幣ハ之ヲ自由ニ放任セハ必ス合法地金人付
給ヲ制理スル所ノ財理ニ從テ伸縮セザルヲ得ス、是レ
余ノ深ク信シテ疑ハザル所ナリ

人若シ精密ニ吾人ノ今開陳セント欲スル通貨ノ原
理ヲ考究スルハ必ス一市場ニ紙幣ヲ發行流通シ
而テ其割引ノ事業ヲ誤ラザル銀行ハ皆必ス過度ノ
紙幣ヲ發行セザル所以ノ事理ヲ明證スルヲ得ベシ
何レレバ其發行ニ於テ止ムベカラザル自然ノ定
限アルヲ以テ其定限ヲ超ユルハ如何程企望スルモ
能ハザル所ナリ「グーセルスニ」氏著ス所ノ銀行
事業論第二百〇七葉八葉ヲ視ヨ

英國ノ經濟學者皆所謂通貨用理即チ貨幣ト交換紙幣

ト相分離スルコノ實際ニ生スベキノ主張シ、而テ單ナ
ル銀行主義ニ加ヘテ其増補トナルベキ主義ニ基テ發
行紙幣ヲ制理スルノ必用ヲ論述セリ、而テ其袖領ナル
モノハ彼ノ有名ナル銀行者ニシテ卓見高識ノ記者「ロ
ルド、タハーストン」但シ同氏ハ其始メ「サムエルジヨン
ス、ロイド」ト称ス氏ナリシ、同氏ハ一千八百四十年一論
説ヲ著撰シ、往昔ハ經濟學者皆不明ニシテ交換紙幣及
貨幣其伸縮ヲ實際ニ同フスルヲ同意是認セシコトヲ
論破シ、且ツ云ク紙幣ハ任意ニ之ヲ交換シ得ベキモノ
ナルモ時トシテ過度發行ノ行ハル、コアルヲ知リシ
ハ現今ノ發明ナリト、而テ同氏ハ終身力ヲ盡シ智ヲ振
ビ以テ談考案ヲ主持セリ、且ツ「ロルト」ヲバ「トマス」
ハ一千八百二十四年と一千八百四十年トノ間ニ

金銀^二山ノ危害ヲ發生シタル所以ヲ論シ其危害
由ヲ一千八百四十四年以前ニ英國政府適當ノ法制^二
設ケ國內ノ紙幣流通高^一但シ其流通高ハ英國銀行紙幣
及ヒ地方銀行紙幣ヨリ組成スルナリヲ制理シ以テ紙
幣ノ伸縮ヲシテ精密ニ貨幣ノ伸縮ニ應合セシムルノ
政畧ヲ舉行セザリシニ歸セリ一千八百四十四年ニ至
リ^四世論ニ云フ如ク同氏ノ企畫建議ニ出テザルモ其常
ニ主張セシ所ノ主義ニ基テ法令ヲ制定シ紙幣ヲシテ
同氏ノ意見ニ拠レバ^五其伸縮ト貨幣ノ伸縮トヲ精密ニ
應合セシ理由ニ從ハシメリ此ニ於テ其後英國ノ財政
上ニ顯ハレシ險害ハ唯投機及ヒ仕込過ノ如キ貿易上
ノ弊風惡俗ヨリ免カルベカラザル結果ニ外ナラザリ
シヲ觀ル斯ノ如キ結果ハ事物ノ性質ニ於テ避クベカ

ラザルモノニシテ其通貨^實ノ紙幣ナルト貨幣ナルト
拘ラス均シク發生セザルヲ得ザリシモノトス
又「^一ウイルソン氏云ク吾人ハ此主義ノ議論ニ通貨用理
ナル名稱ヲ下シタルヲ何ノ理由タルヲ知ラスト
雖^二五ノ常ニ此名稱ヲ用テ世人ノ能ク知ル一種ノ
主義ヲ指示ス^一同氏著ス所ノ財本通貨銀行三論第六
十一葉ヲ觀ヨ

「^二ロルドヲバーストン氏著ス所ノ雜論第一百三十八
葉ヲ觀ヨ

三第一ノ濫出ハ一千八百二十五年ノ危運ヲ以テ終局
スル所ノモノナリ第二ノ濫出ハ一千八百三十年ヨ
リ一千八百三十二年迄持續セリ第三ノ濫出ハ一
千八百三十三年ノ終末ニ起ツテ一千八百三十六年

終リ第四ノ監出ハ一千八百三十八年ニ起テ一
八百三十九年ノ秋ニ至テ終レリ
トリス氏ハ右ニ反對シテ一千八百三十二年ニ於テ
銀行事業上及ビ貿易上ニ聊ノ紛乱アリシヲ觀ス
ト云ヒ、一千八百三十六年ニ顯ハレタル惡結果ハ其
區域特ニ米國及ビ東印度ノ貿易上ニ止マレリト論
シ、又一千八百三十九年ニ於テ理財上ニ聊ノ危運ナ
ク聊ノ失敗ナク割引ヲ得ルニ聊ノ困難アリシヲナ
シト主張シ、且云ク同年ニ於ル理財上ノ變動變化ハ
之ヲ二個ノ事實ニ分解スルヲ得ベシ、乃チ暫時ノ間
利息ノ割合ノ稍増加シタルト英國銀行其先見ノ足
ヲザルヨリ自然ト危險ノ狀勢ヲ識ハシ、為ニ民心
不安ナラシメタルトナリ、同氏著ニ所ノ一千八百三

十九年ヨリ同シク四十七年ニ至レ間ノ物價史第ニ
百六十三葉及ビ二百七十葉ヲ視テ但シ同氏ハ一
八百五十年以前ノ英國理財史ニ於テ正真ノ財政危
運ト名クベキモノハ唯一千七百九十二年ヨリ同シ
ク九一三年迄一千八百十年ヨリ同シク十一年マデ
一千八百二十五年及ビ一千八百四十七年ノ四度ナ
リト論述セリ

ロールド、ヲバーストン氏ハ固ク此法令ノ制定ニ關與
スルノ榮ヲ拒辞セリ、乃チ嘗テ云ク余該法令ノ主義
ニ就キ「サー、ロベルトピール氏ト一言ヲ交ヘシヲナ
シ云々又云ク「サー、ロベルトピール氏ハ一千八百十
九年ノ法令ニ由テ此國ノ宝貨制法ヲ改正シ正
基ニ安置セリサン氏之カ為メ大ナル誹謗ヲ世

ヨ、ケリ、然リト雖、同氏ハ一千八百四十四
制定法令ニ由テ、以テ我寶貨制法ノ正実ナル基礎
永久ニ維持保存スベキ鞏固ナル保護力ヲ得タリ
五※「ロルド、ヲバーストン」氏ノ所見ヲ詳知セント欲セハ
「バードカスル、ラン、バンクス」ノ第一百七十七葉同シ
クハ葉ヲ第二百〇三葉及、二百〇九葉ニ參考セヨ
「ジョウジ、ワルド、ノルマン」氏及、「コロ子ル、トルレンス」
氏ノ如キモ亦「ロルド、ヲバーストン」氏ト其意見ヲ同フ
ス、而テ「ハ、ロベルトピール」氏ハ右諸氏ノ意見ヲ採用
シ國會ニ建議シ、其議決ヲ得テ英國銀行及、合衆王國
其他ノ諸銀行ノ流通紙幣ヲ制理スル條例ヲ制定セ
リ
「トーマストーク」氏ハ其前年ノ著撰、於テ最モ緊密ニ

通貨主義ヲ保持スルモノニシテ余、非ニ之ヲ通貨主義
者ノ袖領ナリト云フモ可ナラン、サ、其晩年ニ至リ
モ、持論ヲ變シ右主義ノ反對論者ノ巨擘トナレリ、抑モ
同氏其前年ニ於テ通貨主義ヲ保守シタルヤ一千八百
二十三ニ出版ノ同氏ノ大著撰物價史第一版及、一千
八百二十六年出版ノ通貨情勢論ニ於テ其意見ノ詳密
ヲ觀ルナリ、而テ余、今進テ此最モ困難ノ論題ヲ考究
スルニ當リ屢、「トーク」氏右前年ノ著撰ヲ引用スベシ
蓋シ之ヲ引用スルノ主意ハ決シテ其自家撞着ノ議論
ヲ引證シ之ヲ是非スルカ如キ惡意ニアラス、又其晩年
ノ著述ニ傷ケント欲スルカ如キ不良ノ考ニ出ルニア
ラス、唯同氏ノ前年ニ保守シタル通貨主義ノ論說
密先、シテ他ノ經濟記者ノ論說ノ遠ク及ハサシ

ナレ 通貨主義ノ全豹ヲ諒解スルニ緊要ト信スル
故ナリ、是故ニトローク氏前年ノ精密完全ナル通貨三論
ノ論說ヲ解示スルハ及テ同氏晚年ニ前持論ヲ変改シ
其後終身保持シタル反對論ヲ大ニ鞏固確實ナラシム
ルノ功アルヤ言ヲ待スシテ明カナリ、然リト雖氏余ノ
意見ヲ以テスレバ英國物價史ノ記者ハ其晩年ノ著撰
ヨリモ寧ロ其前年ノ著述ニ於テ正理ニ接近スルヲ得
タリト思惟ス

殆ト一ハ百四十年ニ至リトローク氏ハ新ニ物價史ノ
前編二卷ヲ出版シ此ニ由テ終ニ通貨主義ノ論者ト分
別シ翻然其前論ヲ變シ初テ其後終身保持セシ意見ヲ
世ニ公ニセリ、但シトローク氏ハ宝貨ノ用理ニ就テ殊
ナルラルトン氏ノ說ヲ引用シ且之ニ是認讃成セリ

一八八三年ヨリ同シク四十七年ニ至ル間

物價史第十一葉及十二葉ヲ視

一八八三年物價史第一出版ノ時ニ當テヤトロー
ク氏ノ思想ハ甚シク通貨主義ノ考說ニ浸潤セシモノ
、如シ、物價ハ銀行紙幣流通高ノ増減ニ從テ騰貴
低落スト云フカ如キ、銀行ハ任意ニ紙幣ノ額高ヲ増加
スルノ能力ヲ有スト云フカ如キ、金貨ノ流入流出ヲ制
理スルハ銀行ガ紙幣發行ヲ制理スルニアリト云フカ
如キ當時世論ヲ固執セリ

同氏ハ其後許多ノ真理ヲ發明シ、前持論ノ非ナルヲヲ
悟リ、口ニ之ヲ論破スト雖氏猶久シク前說ヲ固守シ全
ク之ヲ棄テザリシカ其新考案ノ益々鞏固確ハト
漸次ニ止ヲ得ス其舊考案ヲ棄テシモノ

上文ノ理由アルヲ以テ余若シ「ト」氏前年ノ著
言フハ則チ同氏ノ嘗テ所謂通貨主義ヲ主張セシ
ノ著撰ニシテ晩年ノ著撰ト言フハ則チ同氏其晩年
銀行主義ト名ツクル反對説ヲ保持セシ所ノ著述ナリ
銀行主義ヲ保持スル論者交換紙幣ノ實際ニ膨伸脹起
スルヲナキヲ主持スルノ理由ニアリ即チ
第一膨伸脹起ニ至ルカ如キ増額ノ紙幣ハ之ヲ發行シ
能ハサル事

第二仮令一度之ヲ發行シ得ルモ其紙幣ハ久シク其流
通ヲ世間ニ持續セザル事

「ウイルソン」氏云ク内國貿易ニ對應ニ増進ナキニ但シ
「ホルツ」氏ノ説ヲ引用スルモノナリ（通貨ノ額高ヲ増

加スルハ公衆ノ要セザル紙幣ノ流通高ヲ發行者ノ意
ニ増加スルノ義ニ外ナラス抑モ衆ノ銀行者ヨリ
紙幣ヲ請取ルヤ必ス其之ヲ使用スル利息ヲ拂ハザル
ベシテス而シテ其利息ハ云何程低利息ナルモ公衆ハ
其必需ノ高ヨリ多額ノ紙幣ヲ借ラザルベシ又貿易ノ
便ヲ達スルニ必需ノ額高ヲ超ヘテ多額ノ紙幣ヲ蓄蔵
スルヲナカルベシ是故ニソノ紙幣若シ交換紙幣ナル
ハ右必需ノ額高ヲ超ヘテ發行スルモ其超過高ハ忽
チ其發行者ニ回歸スベシ
「ウイルソン」氏又論スラカ發行事業ニ就テ論スレバ銀
行ハ全ク受體ニシテ進為體ニアラス故ニ社會ノ信用
スル丈ノ紙幣ヲ發行スルヲ得ベシト云ヒ其信用
リ多額ヲ任意ニ發行ハル能ハス「プロフェッショナル」

スル、明スル如ク其受体ナルヤ猶器具ヲ賣捌ク、
店ノ如シ、トール氏云ク物品ノ價直ハ宝貨ノ流通
從テ高下スルモノニアラス、其ニ反シテ通貨額高ノ伸
縮ハ物價高下ノ成果ナリ

右第一ノ理由即チ過度ノ紙幣ヲ發行スル能ハザルノ
理論ハ大ニ尊重スベキ程ノ明論ニアラザルベシト余
ハ思考ス、蓋シ其立論ノ條節ハ諸論理書中ニ於ル物付
ノ運行スル能ハサルヲ証セシ古キ證固法ト一般ニ
論理上ノ空想タルニ過ズ、乃チ喩ヘハ一物体アリ若シ
運行スルモノトスルハ其方向盈ニ運行セザレバ
・虚ニ運行セザルヲ得ズ、而メ其物態ハ虚ニ運行シ能
ハス又盈ニ運行シ能ハス故ニ少シハ運行シ能ハザ
ト立論スルト何ヲ以テカ異ナラン、ナレバ如何セン

際ニ於テ物体ヲ常ニ運行スルハ吾人皆明知スル所
ナリ、而テ「リカルト氏」云フカ如ク一理論ヲシテ苟
銀行紙幣ハ貨幣ノ流通高ニ加ヘテ過度ニ發行スル能
ハザル事ヲ證明スルニ足ル證固法タラシメバ其證固
法ハ又心々「ボトレ」ニ銀鑛ヲ開採シ「カリホルニア」ニ
金鑛ヲ開採シタルモ嘗テ一「フランス」ヲ通貨ニ加ヘザリ
シヲ証明スルニ足ラザルヲ得ス、サレバ如何セン美
降ニ於テ其反對ノ事實ヲ顯ハセシヲ

余輩請フ試ニ論セン今仮リニ歐洲諸國皆金銀ヲ以テ
其通貨ノ用ヲ達セシモノト假定シ、而テ各國同時ニ英
國銀行ト均シク同一ノ理趣ニ基テ一銀行ヲ設立ヤシ
トナサンニ既ニ然ルハ各國皆貨幣ノ流通ヤシニ
ノ差ヲ其ヲ増シ加ヘ能ヒシチランカ能ハザリシ

シ乎、而 既ニ増シ加ヘ能ヒシトスルハ永久其
ヲ流通上ニ持續シ能ヒシナラン乎能ハザリシナ
乎若シ之ヲ流通上ニ持續シ能ヒシトスルハ余モ
意ニシテ論モ此ニ居テ結ビ唯前既ニ社會ノ使用ニ十
分ナル通貨ニ若干ノ増加ヲナシ而テ其増加紙幣ハ満
期為換券交換ノ為メ銀行ニ回帰スルヲナキニ歸着ス
ルナリ

然リト雖モ論者アリ其増加紙幣ヲ流通上ニ持續シ能
ハザリシト云ハ、余ハ乃チ實際ノ經驗ニ質シ往時ヨ
リ漸次ニ銀行紙幣ヲ發行シ而テ永久之ヲ流通上ニ持
續シ得ルハ何故ナル乎ノ説明ヲ請ハザルヲ得ス云々
銀行支配人ノ立論果シテ正當ナラ一銀行紙幣モ當
テ久シク其流通ヲ持續シ能ハザリシテラン、又米國

金銀鑛ヲ開發シタルカ為メ英國ノ通貨ニ一「ギニヤ」金
貨ヲモ加ヘザリシナラン、之ヲ言ヒ「ユレバ」即チ右銀
貨ノ支配人ノ論ニシテ是ナラバ金塊ニ大ナル増加ヲ生
シ世間ニ流出セシト雖モ通貨既ニ世ノ需用ニ十分ナ
リシカ故ニ少シモ通貨ノ額高ヲ増加セザリシナラン
サレモ實際ノ事實ハ全ク此ニ反對シ通貨ノ額ヲ増加
シタルヲ觀レバ右支配人ノ意見ハ荒唐無稽ノ妄言
レヲ信ス「リカルト氏」ボサンクエトニ答フルノ文書
視ヨ

世間貿易ノ所要ニ過分ノ交換紙幣ヲ世ノ流通上ニ持
續シ得ルト然ラザルトノ論題ハ全ク一種ノ論題ニシ
テ此論題ニ就キ銀行主義論者ノ主持スル所ノ理
上文者一理由ニ比スルハ一層尊重スベキ理趣ア

一層精密ノ辨論ヲ要スルナリ

夫レ貨幣ハ其流通高貿易ノ所要ニ過分トナルハ
之ヲ海外ニ輸出シテ減少セラル、ニ至ルナリ
交換紙幣ハ其流通高過度ニナルモ之ヲ輸出シ能ハス
然リト雖モ世人金貨ヲ輸出セント欲シ銀行紙幣ヲ以
テ其發行者ニ送致シ金貨ニ交換セント要請スルカ故
ニ到底其流通高ヲ減少スベシ
不換紙幣ニ至テハ直接ノ輸出ヲ為ス能ハザルノミナ
ラス其發行者ニ交換ヲ要スルニ由ナキヲ以テ其流通
高ヲ減スルノ途ナシ

然リ而テ今コ、ニ考究スベキ論者ハ則チ交換紙幣ノ
伸縮ニシテ、其流通高ノ減縮スルハ伸脹起ノ惡結果
ヲ避ケルニ十分神速ニシテ且必然ナルカ云何ノ論題

ニアリトス

銀行主義ノ論者主張スラク交換紙幣ニ反流ノ理財法
ヲツテ其流通高ヲ制理シ以テ膨伸脹起ノ患害ヲ防遏
スルニ足ルナリト

然リト雖モ右論題ヲ論究スルニ先テコ、ニ開陳スル
ヲ緊要ト信スルモノハ即チ該銀行主義ノ功果ヲ實際
ニ全タカラシムルニハ紙幣ノ交換自由自在ニシテ
シテ制限ナク求ニ應シテ直チニ交換スルモノニアラ
ザルヲ得スト云ニ至テハ該主義論者ノ皆是認同意ス
ルヲ是ナリ、アタムスミス氏云ク流通紙幣若シ確實ノ
信用ヲ世間ニ有スル人民ノ發行ヤシ銀行紙幣ヨリ組
織セラレ、而テ其交換ニ何等ノ制限ナク求ニ應シ、
換セラルベキモノニシテ又實際ニ於テ七常ニ送

ルヤ直チニ交換セラル、其ハ其紙幣ハ即チ其價
金銀貨幣ニ均一ナルベシ

紙幣皆約束券ニシテ直チニ之ヲ交換シ得ルハ其發行
者ノ好意ニ依リ、若シクハ其交換ニ制限アツテ紙幣持
主ノ自由ニ交換シ能ハサルモノ、或ハ若干年數ヲ經過
スル迄ハ其交換ヲ要求スル能ハスシテ其經過ノ間ニ
利息ヲ与ヘザルモノハ上節ニ記載スル紙幣ト全ク其
情勢ヲ異ニシ金銀貨幣ト同一ノ價格ヲ保持スル能ハ
サルヤ疑容ルベカラザルナリ

數年前ニ於テ「スコットランド」ノ諸銀行ハ其銀行紙幣
ヲニ都合句ト名ツクル文句ヲ記入スルノ習慣ヲ有セ
リ、蓋シ其都合句ナルモノハ發行者ニ由テ以テ其紙
幣發行所ニ送致セラル、ヤ直チニ之ヲ交換スベキ

ヲ其持主ニ約束シ若クハ銀行支配人ノ都合ニヨ
リ其送ノ日ヨリ六ヶ月ヲ經過シタル後該六ヶ月間
合法利息ト共ニ交換拂渡ヲ為ス「アル」ヲ約束セシモ
ノナリ、スミス氏云ク銀行支配人ハ屢々右都合句ニ依
リ紙幣ノ持主ヲ誘導シ以テ其要求スル金額ノ一部分
ヲ交換スルニ止マラシメント企圖セリ「スミス」氏著ス
所ノ富國論第一篇三百二十六章ヲ引ク

紙幣若シ其交換ニ制限ナク求ニ應シテ直チニ交換セ
ラル、モノナルハ「ト」氏云ク其反流ノ方法重ニ
二様ナラン、乃チ第一ハ世間貿易ノ使用ニ餘リアル片
ハ人其餘分高ヲ以テ預金トナシ銀行者ニ預ケル事、第
二ハ銀行ノ割引ニ由テ前借ヲナシタル諸証表ノ
拂戻ニ就キ紙幣其流通ヲ辞シ銀行ニ回歸

事第三ハ即チ貨幣ヲ需用スルニ就キ交換ニ據テ
其發行銀行ニ回歸スル事是ナリ、夫レ通貨主義論
所見ニ據レバ交換紙幣ニ於テ無限ノ發行権ヨリ生
ル過度ノ流通ヲ制理スル反流ノ道ハ右第三方法ノ外
他ニ膨伸脹起ヲ抑制スル手段ナキモノ、如シ然リト
雖右第三反流ノ方法ハ其實際ノ用最モ僅少ナルモ
ノナリ（ト）ク氏著ス所ノ一千八百三十九年ヨリ同シ
ク四十七年ニ至ル間、物價史第一百八十五葉ヲ視ヨ
上節ニ引用セシ説ニ據テ吾人ハ近代迄未タ論場ニ發
顯セザリシ一理由ヲ觀察ス、乃チ銀行主義ノ論者若
交換紙幣ハ其過度ノ額高ヲ流通ニ持續シ得ベキ乎ト
詰問セシニ吾人此ニ答テ交換紙幣ハ世間ノ所要ニ過
分ノ額高ヲ發行シ得ベキナリト云ハ、必ス其價格ノ

低落スルヲヲ主持セザルヲ得ス、而テ紙幣低落スルハ
紙幣ト金貨トノ間ニ著シク價格ノ差異ヲ生シ金貨ニ
若干ノ割増ヲ惹起スルハ必然ノ理ナリ、若シ些少ニテ
モ金貨ノ割増ヲ生スルハ世人其割増ヲ得シカ為
紙幣ヲ銀行ニ送り之カ交換ヲ求ムルニ至ラン

然リト雖モ通貨主義ノ論者ナル「ホルマン」氏及「ロル
ド」バーストン氏ガ上節ノ議論ニ答ル所ヲ觀ルニ、云
ク交換紙幣ハ世間ノ所要ニ過分ノ額高ヲ發行シ得ベ
キナリト余輩論述スルモ之カ為メ金貨ト比較シテ紙
幣ノ價格低落スルヲ表明スルニアラス、余輩ノ主張ス
ル所ハ紙幣ト貨幣トヲ問ハス國內ニ流通スル宝貨全
額カ他國ノ通貨ニ比較シテ其價格ヲ低落スト云
アリ、而テ其低落タルヤ限リチク甚大ニシテ金貨

續スベシト云フニ至ルハ余輩ノ固ヨリ主張スルニ
マラス夫レ或國通貨ノ全額ニ總低落ヲ生スル中
ス之カ為メ其國ノ輸入貿易ヲ慫慂鼓舞シ輸出貿易ヲ
萎靡衰頽シ以テ到底通貨ノ價格ヲ回復シ純然タル貨
幣ト平等均一ニ至ラシムベキハ余輩ノ信シテ疑ハザ
ル所ナリ然リト虽其一時ノ膨伸脹起ハ其國ノ生産
及ビ貿易上ニ非常ノ災害ヲ釀生スルニ十分甚大ニシ
テ且久シキハ余輩ノ又主張スル所ナリ然リ而テ通貨
ノ價格低落シタル後変シテ騰貴ノ反動力ヲ發生スル
中ハ其反動ノ勢極テ劇烈ニシテ且神速ナルカ故ニ
貨ノ全額ヲシテ其本然ノ位ニ復スルニ止マラスシテ
忽チ一時ハ遠ク之ニ超ヘ為メニ又工業貿易上ニ損害
困難ヲ惹起スルニ至ルベシ是亦余輩ノ疑ヲ容レザル

所ナリ

右陳述セシ所ノモノハ即チ通貨主義者ノ定論ナリ

夫レ通貨主義論者ノ持論ニ據レバ交換主義ハ固ヨリ
通貨過度流通ノ永時ニ持續スルヲ抑制スル豫防
トナリ通貨低落ノ定限ヲ確定スト雖其該主義ノ實際
ニ効果ヲ顯スヤ特リ物價ノ高低ニ由ル是則チ「ト」
氏ノ意見ニシテ一千八百二十六年其雜誌ニ掲載セシ
所ナリ乃チ云ク通貨過度流通ノ為メ外國ト互商スベ
キ物品ノ騰貴スルヤ此ニ由テ輸入ヲ増進シ輸出ヲ減
縮スル程ニ至ランニハ若干ノ時ヲ經過セザルヲ得ス

談雜誌第九十葉ヲ視ヨ

「ル」氏其著スル「通貨銀行論」ニ於テ論述シ
ク交換紙幣ハ永久其價格ヲ低落スルセニアラス

度低落スルモ到底其代理スル貨ト均一ノ位ニ復ヤ
ルヲ得ザルハ固ヨリ当然ノ理ナリ、然リト虽其情
勢ニ由リ右價格其本然ノ位ニ復シ順整ヲ得ルヤハ
シク時日ヲ經過スルニアラザレハ能ハザルコトアリ
ヘンリー、ヅランモンド氏云ク紙幣ノ交換主義ハ其功
用通貨結局ノ低落ヲ制遏シ通貨ヲシテ本然ノ價格ニ
復セシムルニ十分ナリ云々然リト虽其一時ノ伸縮
干満大害ニ至テハ交換主義ノ能ク抑制シ得ベキ所ニ
アラス云々交換紙幣ナルモ一度價格低落スルニ至ラ
ハクシク時日ヲ經過スル後迄其低落ヲ停止スル能
ザルナリ

ヘンリー、ヅランモンド氏著ス所ノ通貨論ヲ視ヨ、紙
幣ハ世間ノ所用ニ過度ノ額高ヲ發行セラルベシト

ノ説ハ「ゼイル」氏其著ス所ノ「セトリ、アンドン、プレキ
シス、デ、ゼテルバンクウヒシト」ニ於テ大ニ主張
セリ日耳曼ノ理財家ニモ此説ニ同意スルモノ少ナ
ラス

通貨主義ノ論者必シモ皆銀行ハ貿易ノ盛衰ニ拘ラス
紙幣ヲ發行シ之ヲ世間ニ流通セシムルヲ得ベキナリ
ト強テ主張スルニアラス、又膨伸脹起ノ原由ナル投機
博奕ノ氣勢ハ元來殊ニ宝貨ノ過度流通ニ由ルト偏執
スルニアラス、是吾人ノ熟考ヲ要スル所ナリ、ロルド、ヲ
バーストン氏云ク通貨流通高ノ伸縮ハ物價ノ高低ト
貿易ノ浮沈トヲ發生スヘキ起動力トナルコト實際甚稀
ナリ、夫レ斯ノ如キ起動力トナルモノハ人民ノ輕重
心ナル性質ノ如キ供給ト需用トニ就テ計算ヲ誤

如キ收穫ノ豐歟ノ如キ時様好尚ノ變遷ノ如キ立法ノ
政治ノ變動ノ如キ此國ノ通商貿易ヲナス諸外國
ニ於ル貿易ノ盛衰ノ如キ種々不慮ノ災害アツテ民情
ニ影響シ以テ人民ノ元氣ヲ伸縮スルカ如キ是皆貿易
ノ盛衰浮沈ノ起動カナリ、通貨額高ノ伸縮ノ如キニ至
テハ右起動カニ於ク第二位ノ力勢タルニ過キス、且其
力勢タルヤ著シク貿易ノ盛衰浮沈ノ患害ヲ抑制シ若
シクハ之ヲ増進スルノ効アリト雖モ之ヲ起發スルハ
ハ極テ稀ナリ

一千八百二十六年 於テ「トーク」氏論シテ云ク我國
通貨ノ如キ膨脹性一有スルノ通貨ニシテ一度ニ投機
博奕事業ノ發生スルヲアラバ為メニ一種物品ノ騰貴
スル特ニ甚キミナラス通貨ノ全額ヲ膨伸スルカ故

ニ間接ニ他ノ諸物品ヲ騰貴スルニ至ルナリ（同氏著ス
所通貨事情第四十五葉ヲ視ヨ）

同氏又一千八百二十四年ニ於ル英國貿易ニ就キ論述
シテ云ク、此時ニ當テ紙幣ノ發行高ヲ減額シ若シク
其發行ノ制限ヲ定ムルノ緊急ナルハ既ニ甚タ明カ
ナリシニ濫リニ流通高ヲ増進シ之カ為メ投機博奕ノ
氣勢ヲ起發セザルモ既ニ起發セシ後著シク之ヲ煽動
鼓舞シタルヤ疑ヲ容ルベカラザルナリ、云ク此ヲ譬レ
ハ英國銀行ハ原ト火ヲ著ケシモノニアラザリシト雖
モ其火勢ヲ鎮止スルヲ勉メスシテ反テ薪木ヲ供給シ
益々其大火災ヲ擴充シ且之ヲ持續セシモノナリ（同氏
著ス所ノ物價史第二編第一五十八葉ヲ視ヨ）
同氏又紙幣ノ膨伸漲起ニリ主スル結局 成果ニ就

論シテ云ク、人意ヲ以テ恣ニ紙幣ヲ増加スルノ弊セ、
ルヤ必ス萬ノ物品及テ國債ニ書ノ價直ヲ騰貴シテ貨
幣ノ保持シ得ベキ水準ヲ遠ク超ヘシムルニ至ル、既
ニ然ルハ從テ其紙幣ノ敗減ヲ惹起スルノミナラス
其反動力ノ為メ一時非常ニ通貨ヲ減縮シ原ト膨伸ノ
起初セシ所ノ本然ノ度ヲ著シク下ルニ至ルベシ（同氏）
著ス所ノ通貨事情第六十三葉及ヒ六十四葉ヲ視ヨ
右ハ「ト」氏前年ノ著撰ヨリ引用セシ所ナリ、此ニ由
テ同氏ノ主張スル所ハ貨幣ノ定限ヲ超テ紙幣ノ膨伸
脹起スルヤ必ス投機博奕ノ氣勢既ニ萌生スルニ當テ
准發生スト云ニアルヲ觀察スルナリ
「ト」氏又云ク物品ノ買込ヲナスカハキ市場ニ投機
博奕ノ氣勢ヲ顯出スルニアテサレバ、僅令世間貿易ノ

所用ニ過度ノ紙幣ヲ發行スルモ忽チ預金トナツテ銀
行ニ復歸シ若シクハ銀行者ノ金櫃中ニ滯留シ世間ニ
流通セザルベシ（物價史第二編第六十四章ヲ視ヨ）
世間投機ノ氣勢盛ニシテ人々非常ナル利益ノ期望
ニ熱心スル時ニ於テ商業社會必ス平常ヨリ一層多
額ノ寶貨ヲ需用スル理由ヲ信スヘキヲノ難カラサ
ルヤ、余ノ胸裏ニ於テハ猶水ニ熱ヲ加フルハ冷ナル
時ヨリモ一層多量ノ塩ヲ含有スルノ理ヲ信スルノ
易キニ異ナラスト断言スルナリ、「ウ」イルソン氏云ク
夫レ公衆ノ銀行者ヨリ紙幣ヲ請取テ之ヲ使用スル
ニ其使用ノ為メ利息ヲ拂ハサルヲ得ス、故ニ其利息
ハ何程僅少ナルモ公衆ハ其日用必需品ノ額高ヨリ過
分ノ紙幣ヲ請取ニザルベシト、然リト然ルハ是深ク

ハザルノ考案ニテラ得コヤ夫世人皆何
モ常ニ其利息ノ拂出ヲ省クノ一方ニ注意シ又常ニ
費用ヲ儉約スルノ一方ニ偏倚スベキ乎余決テ實
際其然ラザルヲ知ル蓋シ皆時ニ由テ其處措ヲ変ス
或時ニ於テハ商人專ラ儉約主義ヲ保守シ當時ノ貿
易ノ情况ヲ觀察シ殊ニ資本ヲ卸シ大利ヲ得ント企
圖スルモ必ズ其益ナキヲ信シ專ラ出費ヲ節儉セン
ヲ勉ム斯ノ如ク人儉約主義ヲ保守スルノ時ハ尋
常ノ時即チ人民ノ緩慢ナル時ニシテ又非常ノ利益
ヲ得ル好時機ノ未タ達セザル時ナリ又或時ニ於テ
ハ商人皆儉約主義ヲ保守スルヲ過メ其思考其注意
其盡力ヲ進取利益主義ニ專ニシ更ニ冗費ヲ厭ハス
蓋シ其行フ所ノ事業ニ非常ノ利益ヲ得ルノ好時機

タルヲ觀知シ若シクハ之ヲ信スルガ故ナリ是レ進
取繁榮ノ時ナリ斯ノ如キ時ニ當テハ人皆利益ヲ進
取スルニ熱心シ其出入ノ計算自カラ簡ニシテ其金
櫃ノ有金高若シクハ其請取簿ノ記入ヲ精密ニ調査
シ以テ可成丈不用金或ハ利息ノ拂出高ヲ減額セン
ト企圖スルヲ勉メザルナリ

一※諸國多クハ皆殊ニ英國ニ於テハ畫策ノ稽考スベキ
モノ、經驗ノ試ミルベキモノ、事業ノ挺起スベキモノ
改良工作ノ実行スベキモノ、智者材士ニシテ資本ヲ
供シ起業ヤシムベキモノ、既ニ有益ノ貿易ニシテ一
層之ヲ擴充シ以テ益々有益ナラシムベキモノ、決シ
テ少ナシトセザルナリ(ウヰルヤムニユーマー氏
著ス所ノ金塊新供給論第七十一葉ヲ説ヨ)

抑モ投機買込ノ氣勢ハ、起初通例宝貨、過度流通、起原ヤスト雖モ、其氣勢ノ榮止ヤシ時ニ當リ費用スル所ナクシテ任意ニ速ニ増加シ以テ容易ク貿易ノ所要ニ應スベキ貿易ノ中介世間ニ流通スルヲアラバ、之カ爲メ投機買込ノ氣勢ヲ嫩生慫慂スルヤ、必ス内國物品ノ高價ニ對應スルニ必需ノ宝貨カ実價物ト交易ニ於テ外國ヨリ流入スルカ爲メ慫慂スルヨリ、其氣勢ヲ煽動スルコト一層甚シキヲ知ルナリ、是故ニ「ウイールソン」氏カ公衆ハ世間貿易ノ所要ニ必需ノ額高ニ餘分ノ紙幣ヲ保有セザルナリト主唱スルニ答テ通貨主義論者ノ論スル所ハ、乃チ貿易上一般投機ノ風勢ハ必ス物價ヲ騰貴ス物價騰貴スレバ必ス社會以前ヨリモ一層巨額ノ寶貨ヲ要ス、斯ノ如キ時ニ當テヤ公衆ハ必ス紙幣

ノ増加高ヲ世間ノ流通上ニ持續シ、而テ又其之ヲ使用スルノ利息ヲ支辨ス、蓋シ公衆此増加高ヲ流通上ニ持續シ其使用ノ利息ヲ支辨スルノ理由ハ猶前既ニ流通セシ所ノ舊紙幣ノ通用ヲ持續シ其使用ノ利息ヲ支辨シタリシ理由ト異ナルコトナシ

抑モ投機ノ風勢滋蔓スル時ニ乘シテ諸銀行カ勉メテ其紙幣發行ヲ増進スル乎或ハ銀行支配人ニ紙幣増加ノ意思ナキモ貿易上ノ所要ニ由テ自カラ諸銀行ヲシテ紙幣ヲ發行セシムルコト外國ヨリ貨幣ヲ流入セシムルヨリ一層神速ニシテ且廣大ナルコトアラバ其紙幣流通高増加ノ進動ハ必ス左ニ記載スル發行者ノ競争ニ由テ益々其動勢ヲ増スベシ

發行者中ノ競争

一千八百四十年ニ於テ、^ニハド、^ニバースト^ニ氏云ク、ト
國ノ紙幣發行者大ニ^ニ其發行ヲ競争ス、各皆他人ヲ蠶食
セント勉メ、其競争者ヲ害シテ國內通貨全額ノ六部^ノ
已ニ獨占セント翹冀ス、是故ニ甲發行者其紙幣發行ヲ
増加スルハ必ス從テ乙丙等ノ發行者皆其對應ノ發
行高ヲ増加ス、是則チ競争ヨリ起ルベキ正當ノ成果ナ
リ^ニ

^ニフロフ^ニヒソル、^ニゼボン^ニ氏嘗テ銀行主義ノ論者が主張
スル交換紙幣ハ過度ニ發行シ能ハザルノ論ニ一缺
点アルヲ指示セリ、即チ同氏云ク物價一定ノ水準ニ
固止シ貿易ハ沈靜不動ノ情勢ニ止マルハ^ニ於テ一
個銀行者が巨額ノ銀行紙幣ヲ發行流通シ能ハザル
ハ言ヲ待タズシテ明カナリ、蓋シ一個銀行者が全通

貨上ニ影響ス生スル能ハザルヤ猶一個ノ買者が穀
物若シクハ棉花ヲ賣買シテ市場ニ著シキ影響ヲ及
ホス能ハザルカ如シ、然リト雖モ許多銀行者が皆増
加紙幣ヲ發行スルハ猶許多ノ商人が皆穀物將來ノ
産額ヲ賣ラントスルニ似タリ、斯ノ如キ場合ニ於テ
ハ之カ為メ穀物ノ價直忽チ其影響ヲ蒙ムルカ故ニ
金銀地金ノ價格モ從テ又其影響ヲ受クバシ^ニ同氏著
ス所ノ寶貨交易二論第三百十四葉及ヒ三百十五葉
ヲ視ヨ

^ニハド、^ニバースト^ニ氏著ス所ノ雜論第九十七葉九
十八葉ニ第一百十五葉一百二十二葉及ヒ一百二十
三葉ヲ參觀セヨ

マクロー^ニ氏一千八百四十四年前ニ於^ニ英國ノ地

銀行ニ就テ上文ト同一意見ヲ陳述ス、乃チ云ク夫
地方銀行タルヤ國內ノ各地ヲニ散在シ其數百ヲ以テ
算ス、之ヲ一体ニシテ論スレバ夥多ノ各個ヨリ組織ス
ル一競争社會ナレバ各銀行皆已レ一個ノミ其發行高
ヲ減縮スルモ決シテ聊モ通貨ノ全体ニ影響シ能ハザ
ルヲ確信ス、是故ニ各銀行其常ニ取引スル人々ノ輩
固確實ナルヲ信スル間ハ敢テ其發行減縮ヲ考ヘス、其
發行ノ減縮ヲ考ヘザルノミナラズ及テ各銀行者皆知
ル、乃チ已レ若シ其發行紙幣ノ一部分ヲ減縮セバ其競
争者タル者忽チ其發行高ヲ増加シ右減縮高ヲ補充ス
ベシ、而テ已レハ銀行事業ノ一部分ヲ損ヒシテ聊モ紙
幣ノ流通高ヲ減縮スル能ハザルヲ確知スルナリ、此ヲ
以テ實際上ノ經驗ヲ觀察スルニ場合二十ノ内十九ノ

比例ニテ地方銀行ハ皆益々其總發行高ヲ増加シ、貿易
ノ權衡著シク我國ニ不利トナリシ後餘程ノ時日ヲ經
過スルニアラザレバ決シテ止マサルナリ、然リ而テ首
都龍動府ニ於テ理財ノ情勢全ク变化スルヲアラバ地
方銀行モ到底其發行紙幣ヲ減縮セザルヲ得ス、既ニ之
ヲ減縮スルニ轉向セバ前ノ反動力ニ由テ實際十ニ九
ハ減縮ヲシテ適當ノ度ヲ超ヘシメ為メニ再ヒ貿易ヲ
害ナルニ至ルナリ（スミス氏著ス所ノ富國論ノ註文ヲ
視ヨ）

通貨主義ノ論者ハ其持論ノ主眼ニ從テ緊密ニ發行權
ヲ制限スルノ要用ナルヲ主張スト、然レ銀行主義ノ
論者ハ該制限ヲ以テ緊要トス能ハザルナリ
一、貿易ノ所用ニ限リアルヲ以テ吾人ハ均束券ノ夥多

ノ供給ヲ要セザルナリ(カ)ロバールド（ロバート・ロバート）氏ノ言
ルト、ヲバースト（ロバート・ロバート）氏云ク諸競争発行者ニシテ同一
ノ権力ヲ有シ而テ其数ニ定限ナキモノト一個多行者
ニシテ其特権ニ制限アリト雖氏紙幣發行ノ全権ヲ有
スル者トハ各其理趣ヲ異ニシ全ク別個ノ主義ナリ、一
個銀行者ノ場合ヲ以テ許多ノ競争銀行者ノ場合ニ應
用スルハ誤リモ亦甚キモノナリ（同氏著ス所ノ雜論第
一百十七葉ヲ視ヨ）

銀行主義論者ノ定論ハ乃チ交換紙幣ハ世間ノ所要ニ
過分ノ額高ヲ發行スル能スト言フニアルカ故ニ又發
行ノ大競争ハ之ヲ好願スベキモノト主持セザルヲ得
ス、（ア）ロフヒソル、プライス氏論シテ云ク地方銀行者が
紙幣ヲ國內ニ發行流通スルヤ實際ノ經驗ニ由テ中央

銀行ノ紙幣ヨリモ其滋蔓一層神速ニシテ且其伸勢一
層著シキヲ證明セリ（同氏著ス所ノ通貨原論第一百五
十三葉ヲ視ヨ）

（ア）ロフヒソル、プライス氏常ニ紙幣発行者ノ唯一個
ノミナルヲ夥多ナルトハ利何レニアル乎ノ論題ハ
時ト所ト地方ノ情勢慣習トノ如何ニ由テ变化スル
枝葉ノ論（一百五十二葉ヲ視ヨ）ニシテ宝貨原理ノ論
題ニ縁ナキヲ主張セリ、然リト雖氏銀行事業ノ一
課トシテ紙幣發行ノ推ハ屢々妄用ヤラル、カ故ニ
政府法律ヲ以テ之ヲ制限スルノ適當ナルヲ是認
セリ
法律ニ由テ以テ各人皆償還ニ就キ確實ナル抵当ヲ
與フルニアラザル外ハ公衆若シクハ衆人ノ對シテ

紙幣發行ノ如キ大負債ヲ起スヲ制禁シ、又公衆ヲシテ其負債ニ是非スルヲナク一般ニ之ヲ甘受スルヲナカラシムルハ十分正理ニ適合スルモノ云ハザルヲ得ス

各個人已カ為メニスル一己ノ勉力ハ未タ其人及ヒ公衆ノ鞏固安全ヲ保スルニ足ラス、特リ之ヲ保シ得ル力勢アル者ハ政府ノミナルカ故ニ政府之ヲ勉メザルベカラス

「トーク氏モ其晩年ノ著撰ニ於テスラ強ク銀行事業ノ一課トヤシ紙幣發行ノ權ヲ政府ヨリ制限スルノ緊要ナルヲ主張セリ、乃チ同氏云ク米國ノ或新聞記者ニシテ銀行事業ノ自由貿易ハ猶騙哄ノ自由貿易ト同一ナリト論述スルモノアリ、余ハ大ニ其論ニ

同意ス云々又云ク銀行貿易ニ如斯ノ自由權ヲ要求スルハ是此ニ甚シク抗論セザルヲ得ズ、夫レ銀行事業自由ノ要求タルヤ決シテ生産事業ニ於ル競争自由ノ要求ト一同ノ理由ニ基クモノニアラス云々、貨幣ニ紙幣ヲ代用發行スルハ生産事業ノ部ニアラス、政府カ其配下一般ノ便益ヲ企圖センカ為メ制定スベキ法制ノ一部分ニシテ警視ノ領分ニ入ルベキモノナリ」トーク氏著ス所ノ物價史第三編第二百〇二章及ヒ二百〇七章ヲ視ヨ

紙幣ノ發行權ヲ緊密ニ制限スヘキ乎或ハ之ヲ許多銀行ノ間ニ配分（發行權ノ分配）ヲ以テ發行ノ競争ニ放任スベキ乎ノ論題ニ就テハ佛國ノ理財說モ亦兩歧ニ分レタリ蓋シ佛國ニ於テハ佛國銀行ノ獨占權ヲ

有スレカ爲ノ此論題ヲテ實地ノ論題ナラシメリ、乃
チ「ケベリール氏」「コケリン氏」「クニセールセニール氏」
ト其他有名ノ理財家ノ過半ハ發行自由競争論ヲ主張
シ、米國ノ法制ヲ以テ倣擬スベキ最モ善良ノモノトセ
リ、又「タロースキー氏」「ロシ」氏及「レランフラーセル
氏」如キハ英國法制ノ制限主義ヲ保守セリ
一論者多ク該獨占權ヲ以テ彼ノ伊佛與戰爭ノ後「サ
ボイ」地名ノ佛ニ合併セラレタルカ爲ノ來タセシ結
果ナリト喋々セシハ實ニ奇怪ト言フベシ、抑モ「サ
ボイ」銀行ハ該州ノ伊太利ニ屬セシ時ニ於テ既ニ紙
幣發行ノ專權ヲ有セシカ故ニ佛ニ合併セラレタル
後猶其權ヲ持續セント要求セリ、然リト雖モ後令其
權ヲ持續セトスルモ是レ昔日ノ獨占權ニ代用ス

ルニ偶然不意ノ慣用權ヲ以テスルニ外ナラザリシ
ナラン

ニ一銀行が發行ノ獨占權ヲ有シテ紙幣ヲ發行スル
モ許多銀行が自由ニ相競争シテ紙幣ヲ發行スルモ
其結果ハ緊密ニ同一ナルベシ、蓋シ何レニシテモ交
易ノ使用ニ必需ノ定額ヲ超過スル能ハザルベシ（ク
ーヤールセニール氏著ス所ノ銀行事業論第二百葉
ヲ視ヨ）

小額面紙幣ノ發行

紙幣發行自由競争ノ論題ノ外他ニ猶英國ニ於テ一千
八百四十年前交換紙幣ニ係ル議論ノ一トナリ、モ
アリ、即チ小額面紙幣發行ノ論題是ナリ、此論題ニ就
ト「ハ」氏ハ一千八百二十六年ニ於テ左ノ如ク論

全通貨ノ内云何ナル條理基クモ云何ナル制限
ケアルモ決シテ久シク流通セシムベカラザル
リ、何ゾヤ價格五封度以下ノ銀行紙幣是ナリ、夫レ此紙
幣タルヤ何レノ点ヨリ觀察スルモ實ニ交易ノ中介ト
シテ甚タ好マシカラヌ紙幣ナリ、其故何トナレバ斯ノ
如キ小額面紙幣ハ大額面紙幣ヨリモ一層容易ニ過度
發行ノ弊害ヲ醸生シ、而テ其流通スル地方ニ於テハ必
ス貨幣ヲ流通上ヨリ全ク逐斥スルニ至ルベキカ故ナ
リ
論者アリ下等社會ノ人民ハ任意ニ地方銀行紙幣ヲ請
取ルヲ拒辞スベキ自由權ヲ有スルナリト主張スルハ
愚モ亦甚シキモノト云フベシ、實際上取引ノ十二八九

ハ人民斯ノ如キ任意權ヲ有ヤス又有人能ハザルナリ」
一千八百二十五年ノ實地經驗ニ由テ英國ノ輿論ハ小
額面紙幣ヲ不是トシ甚シク之ヲ駁撃セリ、是レ「トーク
氏」上文ヲ記セシ時ニ當テ其胸裏ニ記憶ヤシ所ナリ、而
テ英國ニ於テハ世人ノ多ク知ル如ク終ニ小額面紙幣
ヲ國內ノ流通上ヨリ全ク引去レリ、當時米國ニ於テモ
經濟學者亦同シク一般ニ小額面紙幣ノ不是ナルヲ
痛詠セリ、然リト雖モ「フロワ」氏ノ如キ
ハ全ク「トーク」氏ト反對シ、今通貨ノ通貨タル所以ノ條
理ニ就テ考察スル所ニテハ特リ小額面紙幣ニ限リ其
發行ニ制限ヲ設ケザルベカラザルノ理由ナキ
且ツ「スコットランド」が嘗ニ一封度銀行紙幣ノ流通
持續ニ得タルハ大ニ英國ノ榮譽トナリシヲ明ニ

同氏著ス所ノ通貨論 第一百五十四葉ヲ視ヨ
「ウイルソン氏モ其著撰通貨銀行ニ論ニ於テ英國銀
ヨリ一封度紙幣ヲ發行スルノ良策タルヲ痛論シ上
ツ之カ為メ大ニ該國宝貨ノ費用ヲ節儉スベキヲ説ケ
リ、同氏又論シテ曰ク夫レ一封度紙幣ヲ非認スルノ偏
見ハ實ニ英國銀行紙幣交換停止ノ間ニ醸生セシモノ
ナリ、サレトモ道理上ニ於テハ一封度紙幣ニシテ非認
セラレバ五封度紙幣モ亦均シク非認セラルベキノ理
ナラン、抑モ小價格紙幣廢棄ヲ主張スル論者ガ緊密ニ
理財上ニ就テ主持スル理由ハ即チ三種アリ、乃チ第一
上文ニ引用セシ「トリック氏ノ説ク所ノ如ク小額面紙幣
ハ其交換主義ノ働キ不充ナルカ為メ大額面紙幣ヨ
リモ一層容易ニ過度發行ノ弊害ヲ發生スルナリト云

フニアリ、但シ小額面紙幣ハ其交換主義ノ働キ不充分
ナル所以ノモノハ抑モ小額面紙幣ヲ所持スルモノハ
多ク下等社會ノ人民ニシテ其暗愚ナルカ為メ若シク
ハ貧窮ナルカ為メ若シクハ其所持ノ紙幣ヲ發行セシ
銀行ノ遠隔セルカ為メ實際之ヲ其發行銀行ニ送致シ
交換スル能ハザルナリ、既ニ上文ニ開陳セシ如ク一千
八百十七年ニ於テ英國銀行其一封度紙幣ニ封度紙幣
ヲ貨幣ニテ交換セシト公布セシ時ニ當テヤ（第三百五
十六葉ヲ視ヨ）之カ為メ其貨幣ヲ需用シタルノ意外ニ
僅少ナリシト雖、大額面紙幣ノ交換ヲ公告シタル時
ニ於テ交換ヲ要求セラレシ紙幣額高ノ巨多ナルヤ、
國銀行ヲシテ止ヲ得ス終ニ其交換ヲ停止セシムル
至レ、是レ益シ上文ニ記載セシ小額面紙幣交換

僅キ不充ナル理由、因由スルナリ

第二下等社會ノ人民中ニ流通スル貨幣ハ紙幣ヲ以テ
スル諸銀行ニ取テ實ニ最良ノ準備金トナルモノナ
サレ氏若小價額紙幣ヲ發行セバ之カ為メ忽チ流通上
ヨリ驅逐セラレ人目ヲ辞シ去テ全ク消失スルニ至ル
ナリ、^{「サ」}トーマス、グレスム氏云ク是理財ノ定則ナ
リ然リ而テ^{「ト」}ク氏ハ一千八百二十六年著撰ニ於テ
^{「バ」}ーリニング氏ナル者が嘗テ一千八百十七年及ヒ一千
八百十八年ニ於ル佛國銀行ノ实例ヲ以テ一千八百十
九年ノ調査委員ニ報告セシ所ノ論旨ヲ引用シ右流通
幣カ銀行ニ取テ最良ノ準備金トナルベキヲ論陳セリ
乃チ云ク銀行濫リニ紙幣ヲ發行シタルガ為メ非常ニ
其準備金ヲ減少スルノ不幸ニ遭ヒシ時ニ當リ其金庫

ノ缺乏ヲ補充スルニハ、仮令其時外國へ拂渡ノ大需用
アルニ拘ラス、流通貨幣ニ由ルヨリ容易ナルハアラザ
ルナリト

(同氏著ス所ノ通貨事情第一百十一葉ヲ視ヨ)

^{「ハ」}ーリニング氏曰ク佛國銀行ハ濫リニ紙幣ヲ發行シタ
ルカ為メ其準備金ヲ一億一千七百萬^{「フ」}ランクヨリ減
シテ三千四百萬^{「フ」}ランクトナセリ、其後發行事業ヲ謹
慎シタルヨリ一億萬^{「フ」}ランクニ回復スルヲ得タリ、然
リト雖氏如斯ニ準備ヲ補充スルノ幸ヲ得タルハ即チ
貨幣其通貨ノ著シキ部分ヲ占ル國ニ起リシ事實ナル
ヲヲ常ニ忘却スベカラザルナリ
小價格紙幣ニ係ル^{「フ」}ロフ、ソル、ブライス氏ノ持論
公明ハ批評ヲ下シ得ベキハ是此点ニアルナリ、蓋

テイム氏ハ銀行紙幣、其面ノ大小ヲ問ハ、皆交
幣ナリト想像シ而テ大ニ小額面紙幣ノ禁制ヲ囑
且五封度十封度ノ交換紙幣若シ善良ノ紙幣タ
封度ニ封度ノ交換紙幣モ亦善良ノ紙幣ニアザルヲ
得シヤト論スレバ如何ヤン一封度ニ封度紙幣ヲ發行
スルカ為メ世間流通上ヨリ驅逐セラレ以テ消失ニ至
ルベキ流通貨幣ハプライス氏派ノ經濟家が皆大額面
紙幣ヲ交換スルニ必需トヤシ一大資力ナリ、其資力ニ
シテ消失スルニ至ラハ何ヲ以テカ其準備ニ引キ當テ
以テ交換紙幣タルノ実ヲ全フセンヤ、夫レ紙幣ノ交換
紙幣タル所以ノモノハ決シテ其名アルノ故ニアラス
常ニ求ニ應シテ交換セラル、カ故ナリ是レプライス
氏ト雖此是認タル所ナリ

論者ノ小額面紙幣ヲ以テ不足トスル第三ノ理由ハ即
チ左ノ事理ナリ、夫レ小額面紙幣タルヤ之ヲ所持スル
モノハ多ク下等社會ノ人民ナルヲ以テ其持主或ハ銀
行ノ行情ヲ知ルニ由ナク或ハ交換ノ為メ速ニ紙幣ヲ
發行銀行ニ送致スル能ハザルヨリ從テ交換主義ノ働
キ甚タ不充分ナリ此働キノ不充分ナルカ為ニ尋常平
時ニ於テ過度發行ノ弊害ヲ醸生スルヲ少ナカラサ
レ其害猶此ニ止マラス其持主ナル下等社會ノ愚昧無
智ナルカ為メ其所持スル所ノ小額面紙幣ハ屢々一國
内全宝貨ヲ舉テ廢減セシムル禍源トナルヲアリ、其故
何トナレバ凡ソ紙幣交換上ニ要請騷擾ヲ發生スルハ
必ス無智昧昧ニ始マレナリ且ツ夫レ無智昧昧
徒ハ常ニ堪ヘ忍テ不良ノ宝貨ヲ久シク取引スト雖此

度ニ交換上ニ人氣騷擾ヲ生スルハ其氣勢最モ劇烈ニシテ忽チ大騷擾トナリ、揣摩ヲ逞シ憶測ヲ恣ニ其無識ナルカ故ニ妄ニ驚キ怖レ辨解モ説諭モ之ヲスル能ハザルニ至リ、銀行ノ戶外ヲ圍繞シ雜沓錯乱以テ交換ヲ要求シ終ニ自己及ビ全社會ニ災害ヲ惹起スルヲアリ、ホルスリー、パルメル氏云ク銀行ヲシテ突然交換大騷擾ニ非過セシムルモノハ小額面紙幣ノ發行ナリ云々、又云ク小額面紙幣ヲ所持スルモノハ多ク下等社會ノ人民ナリ、下等社會ノ人民ハ一度紙幣ノ流通上ニ疑惑ヲ生スルハ恐怖騷擾スルヲ特ニ甚シキモノナリト、又英國銀行支配人ノ證明セシ所ニ拠レバ一千八百二十五年ニ於ル交換要請騷擾ノ禍源モ小額面紙幣ノ發行ニ因由セリト

此論點ニ至リ下等社會ノ貧民ハ其貧困無告ナルカ爲メ政府ヨリ特別ノ保護ヲ求ムルノ権理アリト云フニ至テハ全ク政論ニ屬スルヲ以テ余輩ノ今此處ニ論陳スルヲ要セザルナリ

小額面紙幣ハ大額面紙幣ヨリモ稍之ヲ贋造スルニ容易ナル事ニ至テハ之ヲ此處ニ記載スルニ足ルナリ、抑モ一千七百九十七年英國銀行ヲシテ其交換ヲ停止セシムルノ法令ヲ發セシヨリ久シカラス續テ其銀行ヲシテ價格五封度以下ノ紙幣ヲ發行ヤシムルノ法令ヲ議決シ而テ之ヲ實際ニ施ヤリ、此ニ於テ其結果ハ驚クヘク紙幣ノ贋造ヲ増進ヤリ、夫レ一千七百九十七年以前二十一年間ニ於テ該犯罪ノ爲メ刑ニ処セラレタモノハ僅々五十六人ニ過ザリシカ一千七百九十六年

リ一千八百十八年ニ至ル二十一年間ニ於テ銀行紙幣
贋造ノ為メ死ニ処セラレタルモノハ三百十三人
多キニ至レリ

小額面紙幣ハ大額面紙幣ヨリモ之ヲ贋造スルニ一
層容易ナルハ疑ヲ容ルベカラザルナリ、是レ荒唐空
漠ナル理論ノ類ニアラス實際ノ經驗ニ由テ知ラレ
タル重要確實ノ事理ナリ、蓋シ此事理タルヤ決シテ
通貨主義ヨリ考案セシ理由ニアラス機械學製造術
上ヨリ来リシ理由ナリ、故ニ經濟家通貨ノ原理ヲ開
陳スルニ當テ必シモ論スルヲ要セザル所ナリ、アラ
イス氏著ス所ノ通貨原論第一百五十五葉ヲ視ヨ

